

『長塚節歌集』の形容詞

蜂 矢 真 郷

近代短歌に見える形容詞に関する問題については、鈴木丹士郎氏「現代短歌に見られる形容詞の用法——補助活用の本活用化——」・「現代短歌に見られる形容詞の分類」・「近代短歌における和語の再生」に詳しい。氏は、④日本近代文学大系23『石川啄木集』・⑤同43『斎藤茂吉集』・⑥現代日本文学全集69『岩波文庫 長塚節歌集』・⑦同90『現代短歌集』^(注2)に収められている短歌を中心に、文語形でありながら中古などには見えない形容詞の語彙や、同じく形容詞としては中古などに見えてもその用法が中古などには見えないもの（以下、これらの問題を形容詞の語彙・用法と括って呼ぶことにする）の例を多く挙げて考察されている。

ところが、近代短歌の中で鈴木氏①・②・③が考察の対象とされていない長塚節のものをみると、さらに注意されるべき例がいろいろ見えるので、氏に続き氏の論を補う意味で、以下にそうした例を挙げつつ述べて行きたい（節の短歌は岩波文庫『長塚節歌集』^(注3)による）。なお、鈴木氏①・②・③の他に、近世擬古文に見える形容詞について述べられる同氏④『近世文語の研究』第六章・第十章および附録「形容詞本活用機能を果たしている補助活用語彙一覧」、⑤「補助活用形容詞の機能拡大——近代文語の一問題——」^(注4)についても、必要に応じてふれる。

二

鈴木氏①が挙げられるのは、形容詞補助活用（カリ活用）が、中古などには本活用が用いられるところに用いられるものである。同氏①・②・③・⑤はこれを「補助活用の本活用化」と呼ばれると（同氏④は第六章の標題のように「形容詞補助活用の活用形造出ならびに機能拡大」され、同氏⑤は標題のように「機能拡大」ともされる）。そうした例を節の短歌に求めてみると、これは少ない。

まず、補助活用の例は多くない。未然形カラ五例、連用形カリ五例、連体形カル三例の一三例である。

いささかも濁れる水をかへさせて冷たからむと手も触れて見し（一九一四^(注5)年五月詠）

なでしこの交れる草は悉くやさしからむと我がおもひみし（同七月詠）

曉の水にひたりて鳴く蛙かはづすずしからむとおもひ汗拭くあせふ（同）

かくしつわれつ我は瘦せむと茶を掛けて硬き飯はむあに豈うまからず（同八月一九日詠）

瓜むくと幼き時ゆせしがごとたと豎さに割かば尚うまからむ（同九月九日詠）

糲斗菜を母と二人が見てし日は障子はいまだ白かりしかど（一九一二年一月二六日詠）

咳き入れば苦しかりけり暫くは襲ねて居らむ単衣欲しけど（一九一四年五月詠）

蚤くひの趾などみつ水をもて肌拭くほどは涼しかりけり（同七月詠）

嗽ひしてすなはちみれば朝顔の藍また殖えて涼しかりけり（同八月一日詠）

吸物にいささか泛けし柚子の皮の黄に染みたるも久しかりけり（同十一月一日詠）

夜なべすと縄なはな縋ふ人よ鰯掛の鰯の光はさやけかるかも（一九〇七年晩秋詠）

杉山のせまきはさまの晩稻刈ると夕をゆふはやみ冷たかるらむ（同）

白銀の鍬打つごとききりぎりす幾夜はへなば涼しかるらむ（一九一四年七月詠）

補助活用の例は、一九一四年の詠が多いことがやや注意される。

連体形カルは、助動詞ラムに続く例二例、助詞カモに続く例一例であるが、前者は「補助活用の本活用化」ではなく、助詞カモに続く後者サヤケカルのみが「補助活用の本活用化」に当たる。

助詞カモに続く場合は、本活用連体形キが用いられるのが本来で、そのような例も見える。

まなかひの狭国なれど怪しくも遙けきかもくもよ雲の八つ峰は（一九〇四年一月五日詠）

葉鶏頭に蕪おしつけて干す庭は騒がしくしておもしろきかも（一九〇七年晩秋詠）

ゆくりなく拗切りてみつる蚕豆の青臭くして懐しきかも（一九一二年三月七日詠）

かくのごと頼すりつけてうなづけば蚊帳釣草も懐しきかも（一九一四年七月詠）

撫子はいまに果敢なき花なれど捨つと言にいへばいたましきかも（同）

助詞カモに続く際に、補助活用連体形カルが用いられる例も、本来の用法である本活用連体形キが用いられる例も音数律に合っていない、また、前者の例より後者の例の方が多いので、通常は後者の連体形キを用い、音数律によっては前者の本来ではない連体形カルを選んだものと見られる。

ところで、「補助活用の本活用化」に当たるサヤケカルカモの例のサヤケシは、後に第三節に挙げるケシ型形容詞であるが、亀井孝氏『概説文語文法』は、ケシ型形容詞を「不完全形容詞」と、他の形容詞を「完全形容詞」と、形容動詞を「補充形容詞」と、また、

補助活用を「補充活用」と呼ばれて、

不完全形容詞は、已然形を欠く。また、補充活用の派生が完全形容詞のように自由におこなわれない。すなわち、完全形容詞においては、その補充活用がはたすところの機能を、不完全形容詞は、主として（略）補充形容詞にゆだねるのである。

と述べられて、ケシ型形容詞の活用が「不完全」であることを指摘されている。ケシ型形容詞は、亀井氏が指摘されるところの已然形のみならず、上代に見える未然形ケをも欠いている（氏の指摘される已然形はケレのみであるかもしれないが、上代に見える已然形ケをも欠いている）。右のサヤケカルカモの例は、ケシ型形容詞サヤケシが「自由におこなわれない」ところの補助活用に活用していることになる。尤も、以前に述べたように、サヤケシの補助活用の例は中古などの和歌に見え、萬葉集にもサヤケクアルラムないしサヤケカルラムと訓まれる「（清有良武）」（三五六）、サヤケクアリケリないしサヤケカリケリと訓まれる「（清有家里）」（二〇七四）の例が見える。

連用形カリは、助動詞キに続くもの一例、助動詞ケリに続くもの四例で、いずれも「補助活用の本活用化」ではない。

未然形カラは、助動詞ムに続くもの四例、助動詞ズに続くもの一例であるが、後者は「補助活用の本活用化」ではなく、助動詞ムに続く前者が「補助活用の本活用化」に当たる。すなわち、助動詞ムに続く場合は、本来本活用未然形ケが用いられるものである。尤も、後に第四節に述べるが、未然形ケは、上代に用いられ基本的に中古以降には用いられないものであつて、中古を基準にすれば「補助活用の本活用化」とするのは難しい。しかしながら、後に第三節以降に述べるように、節は萬葉集などに見える上代の語彙・用法をよく用いていると見られ、その点からすれば、鈴木氏（日・田）の言われることは時代が異なり活用形も異なるけれども、本来は本活用が用いられるところに補助活用が用いられるという意味で、これも「補助活用の本活用化」と言つてよいであろう。

助動詞ムに続く場合に未然形ケが用いられる例も見える（うち一例は、さらに接尾辞クに続くク語法の例である）。

あたたかき安房の外浦は麦刈ると枇杷もいづくくなべて早けむ（一九〇五）（明治三六） 年五月詠

何鹿（いかりが）の和知（わち）のみ溪（たに）の八十村（やそむら）に名に負ふ栗山（くりやま）いまだはやけむ（同九月二二日詠）

うみ草（うみくさ）なす長き短きけぢめあれば昼はまさりて未だ暑けむ（一九〇七）（明治四〇） 年初秋詠

くさまくら旅（た）にも行かず木犀（もくせい）の芽立つ春日（はるび）は空しけま（むな）くも（一九〇二）（明治三五） 年四月詠

助動詞ムに続く際に、補助活用未然形カラが用いられる例も、上代の本活用未然形ケが用いられる例も、音数律に合っていて、いずれを用いるかは音数律によつて見られる。ただ、そのうち、さらに接尾辞クに続くムナシケマクモの例は、ハカラマク（注10）の形にならないと見られて、未然形ケを用いることになる。

未然形ケおよびク語法については、後に第四節に述べる。

次いで、鈴木氏(口)が挙げられるところのケシ型形容詞は、節の短歌にもかなりの例が見える。

サヤケシ うなねつき額づきみればひた丘の木の下萱のさやけくもあるか (一九〇三) 年七月詠、他五例

シヅケシ 真熊野のしづけき海に飛ぶ文鰯魚の尾鰭張り飛び浪の穂に落つ (同八月九日詠、他四例)

ハルケシ かくのごとありける花を世の中に一人ぞ思ふ其の遥けきも (一九一二) 年二月二〇日詠、他一例

カンケシ 菜の花の乏しき見れば春はまだかそけく土にのこりてありけり (一九〇八) 年五月詠、他二例

タヒラケシ 生きも死にも天のまにまにと平らけく思ひたりしは常の時なりき (一九一二) 年詠

ハロケシ 大空は高く遥けく限りなくおほるかにして人に知れずけり (一九〇七) 年春詠

スミヤケシ すみやけく人も癒えよと待つときに夾竹桃は綻びにけり (一九一四) 年六月詠

マサヤケシ かしこきや神の白丁は真さやけき御裳濯川に水は汲ますも (一九〇三) 年八月九日詠

ケヤケシ 此頃は食糧もうまし秋茄子の味もけやけし足らずしもなし (一九〇七) 年晩秋詠

サムケシ よもすがら雨の寒けくふりしかば嶺の上には雪ぞ降りける (一九〇三) 年一月二〇日詠、他二例

ヲシケシ みれど飽かぬ那智の滝山ゆきめぐり月夜に見たり惜しけくもあらず (同八月一〇日詠)

右のうち、サヤケシ・シヅケシ・ハルケシ・カンケシ・タヒラケシは、いずれも萬葉集に見えるものである。そして、ハロケシ・スミヤケシは、母音交替の関係にあるハルケシ・スミヤケシが萬葉集に見えるものであり、マサヤケシも、接頭語マを伴わないサヤケシが右にふれたように萬葉集に見える。節の短歌は、萬葉集に見える語彙をよく用いていると言えよう。

さらに、ケヤケシ・サムケシ・ヲシケシは中古に見えるものであり、また、右のスミヤケシ・マサヤケシも中古に見えるものである。とすると、ハルケシが上代(・中古)に見えるものであっても、上代・中古に見えない右のハロケシは注意すべき例ということになる。

この他に、上代・中古に見えないという点で同様に注意される例に、次のようなものがある。

ササヤケシ ささやけきかぞの白紙の爪折りて桔梗の花は包まれにけり (一九一四) 年七月二三日詠

ヒヤヤケシ 冷やけく茶の木の花に晴れ渡る空のそぐへに見ゆる秋山 (一九〇三) 年詠

ひややけき流れの水に足うら浸で石を枕ぐ旅びとわれは (一九〇五) 年九月一〇日詠

ひややけく庭にもりたる白沙の松の落葉に秋雨ぞ降る (同九月二〇日詠)

マタケシ なうれひそと人はいへどもまたけくてあらばかあらむ我愁ひざれや（一九二二）（明治四五） 年一月詠

右のうち、ササヤケシは、それが中古にあるとすればその語幹の用法と見られるササヤケ人の例が紫式部日記に見えるが、活用した例を上代・中古に見出だすことができない。

鈴木氏曰、目が挙げられるように、ハロケシは佐佐木信綱『黎明』（一九四五）（昭和〇〇） 年一月刊八雲書店」などに見え、また、同じく、ササヤケシは木下利玄『紅玉』（一九一九）（大正八） 年七月刊玄文社」などに見え、ヒヤヤケシは若山牧水『山桜の歌』（一九二三）（大正一二） 年五月刊新潮社」、木下利玄『一路』（一九二四）（大正一三） 年二月刊竹柏会」などに見える。また、ハロケシは、中村憲吉『軽雷集以後』（一九三三）（昭和九） 年一月刊岩波書店」にも、

くさ原の盤紆はろけし雨のなかとほき小山に馬あらはるる（一九二八）（昭和三） 年詠

のように見える。けれども、マタケシは、鈴木氏曰、目にも挙げられていなくて、珍しい例のようである。また、ハロケシおよびササヤケシ・ヒヤヤケシは、いずれも鈴木氏曰、目の挙げられる例などより節の例の方が古いと見られて、その点でも注意されてよい。

ところで、ケシ型形容詞の多くがカ（・ヤカ・ラカ）型語幹と対応する一次的ケシ型であるのに対して、サムケシ・ヲシケシはカ（・ヤカ・ラカ）型語幹と対応しない二次的ケシ型の一つのパターンであり、これは、形容詞サムシ・ヲシのク語法サムケク・ヲシケクがケシ型形容詞サムケシ・ヲシケシの連用形であるかのようにとらえられて形成されたものと考えられるが、マタケシも、時代は下るものの、サムケシと同様に形成されたものと考えられる。なお、形容詞のク語法については、未然形ケの例として第四節に挙げる。

ところで、ケシ型形容詞とは別に、次のような例が見える。

アタタカシ はりの木の花さきしかば土ごもり蛙は啼くもあたたかき日は（一九〇四）（明治三七） 年詠、他三例

ヤハラカシ 鬼怒川の篠の刈跡にやはらかき蓬はつむも笹葉掻きよせ（一九〇五）（明治三八） 年春詠、他二例

アタタカシ・ヤハラカシに対するケシ型形容詞にアタタケシ・ヤハラケシがあり、とりわけアタタケシは仮名書き例ではないが萬葉集に例があるので、ケシ型形容詞の方が用いられてもよいところであるが、そうした例は見えず、専らアタタカシ・ヤハラカシが用いられている。

四

節の短歌は、萬葉集などに見える上代の語彙・用法を意識的に用いているところがあると見られ、その中の一つに、形容詞の、中古以降には基本的に用いられない未然形ケ・已然形ケの使用がある。

未然形ケの例は、次のようである。

こもりくの初瀬のみちは艾なす暑けくまさる倚る木もなしに（一九〇三（明治三六）年八月四日詠）
清見瀉三保のよけくを波ごしに見つつを行かむ日のくれぬとに（同八月十七日詠）

右の他に、第二節に「ケム・」ケマクの例として挙げた四例が加えられて、未然形ケの例は、接尾辞クに続くもの二例、助動詞ムに続くもの四例（うち一例は、さらに接尾辞クに続く）である。未然形ケが接尾辞クに続くク語法の例は、上代によく見えるが、中古には和歌にのみ若干見えるものである。助動詞ムに続きさらに接尾辞クに続くク語法の例も、上代に見え、平安初期の訓点資料に若干見えるものである。これを除く未然形ケが助動詞ムに続く三例は、中古には補助活用未然形カラが助動詞ムに続くところで、第二節に挙げたように、節には「カラ」の例も四例見える。

他方、已然形ケの例は、次のようである。

此日ごろ霜のいたけば雨のごと公孫樹の黄葉散りやまずけり（一九〇五（明治三八）年詠）
右の他に、第二節に補助活用連用形カリの例として挙げた「咳き入れば」歌に「単衣欲しけど」とあつて、已然形ケの例は、助動バに続くもの一例、助詞ドに続くもの一例である。

これに対して、已然形ケレの例も見える。助詞ドに続くものである。

利根川の冬吐く水は冷たけれどかたへはぬるし潮目揺る波（一九〇六（明治三九）年一月十七日詠）
睦岡の杉の茂山しげけれど冬にし病めば淋しくあるらし（一九〇七（明治四〇）年詠）

已然形ケの二例は音数律に合っていて、已然形ケレの「睦岡の」歌の例も同様であるので、いずれを用いるかは音数律によっているかと見られるが、今一つの「利根川の」歌の例は、「冷たけれど」と字余りになつていて、ここは已然形ケを用いて「冷たけど」とする方がよかったかとも思われる。

結局、未然形ケ・已然形ケを用いることが多いが、音数律によつては未然形カラ・已然形ケレを用いて、「利根川の」歌は例外であるということになる。

五

節の短歌には、ミ語法の例が多い。ミ語法は、上代にはよく用いられるのに対して、中古には、和歌に用いられる他、訓点資料にサ変動詞スを伴う形で用いられるなどするが、全体として衰えて行くものである。

節の短歌の例は、x(フ)yミの形で用いられるものが大部分で、二九例が見えるが、ここには比較的古い詠をいくらか挙げておくにとどめる。

生垣いけがきの杉の木ひくみとなり屋の庭の植木うゑぎの青芽あそめふく見ゆ（一九〇〇 明治三二 年詠）

押し照おしれる月夜さやけみ鳥網とあみ張る秋田あきたの面おもに霧立きりたちちわたる（一九〇一 明治三三 年一〇月二五日詠）

世の中よなかをあらみこちたみ嘆なげく人ひとにふりかかるらむ菩提樹ぼだいじゆの華はな（一九〇三 明治三六 年詠）

x(ヲ) yミの形のミ語法の例は、節の師である正岡子規の短歌にもさらに多く見えて、その影響が考えられよう。なお、子規には、x(ヲ) yミの形の他のミ語法の例が僅かにしか見えず、また、それらは特に問題があるものではないようである。

その他の七例を、全て次に挙げる。

(1) うちわたす二つの滝たきの下つせの落合おちあひの瀬せは木深こぶかみ見えず（一九〇〇 明治三二 年詠）

(2) 鯖釣さばづりに沖おきこぐ蟹あまもかしこみと花たむけしゆ負おへるこの名か（一九〇三 明治三六 年八月一日詠）

(3) かさご釣つる磯いそもしづけみ頬白ほししろの鳴くが寂さびしきこれの遠崎とほさき（一九〇五 明治三八 年六月一日詠）

(4) 木曾山きそやまはおくがは深み思はねど見ゆべき峰かみも隠りけるかも（同九月九日詠）

(5) 松蔭まつかげの草の茂もみに群れさきて埃ほりあに浴ひそめみしおしろいの花（同九月二五日詠）

(6) うるはしみ見し乗鞍のりくらは遠くして一目といへどながく矜ほこらむ（一九一一年 明治四四 年詠）

(7) 古蚊帳ふるがやのひさしく吊りし綻ほころびもなかなかいまは懐なつかしみこそ（一九一四年 天正三二 年一〇月詠）

このうち、(5)「茂み」は名詞に現れる例で、萬葉集にも見える。また、(7)「懐しみこそ」は後に「すれ」（ないし「思へ」）が省略されて見ればこれでよいとも見られる。

それに対して、(5)・(7)の他の例は些か問題があろう。(1)「木深み」は、「落合の瀬」が「見えず」であることの理由を表していると思われる。「木深み」とあるべきところであろう。「立石の山こえゆけば落葉松の木深き溪に鵲うすの啼く声」（一九〇五 明治三八 年九月六日詠）のような例も見えるので、形容詞「木深し」として用いたかとも見られるが、その場合もミ語法として適切とは言えない。(2)「沖こぐ蟹もかしこみと」は、「かしこみて」のように動詞カシユムの連用形＋テとして用いるのがよいであろうか。(3)「磯もしづけみ」は、助詞モが用いられているが、助詞ヲを用いてxヲyミの形の「磯をしづけみ」のようにあるべきところかと見られる。(4)「おくがは深み思はねど」は、ミ語法が思フを伴う場合には形容詞が感情形容詞であることが多く、「おくがは」と「は」が示されていることからすると、字余りになるけれども「おくがは深しと思はねど」と（あるいは「は」を削って「おくが深しと思はねど」と）あるべきところであろうか。(6)「うるはしみ」は「見し」との関係を考えて、「うるはしく」とあるべきところと見られる。

尤も、竹内史郎氏「ム型・ブ型・ミス型動詞とミ語法」が指摘されるように、「山高み（山高美）川とほしろし」（萬四〇一）・「重辱しづら恐おそ坐ま」（二三詔・続紀天平勝宝元年）などと、「形容詞連用形の用法と等価な」例が上代に見えるので、(6)「うるはしみ」は「う

るはしく」の意で、(4)「おくがは深み」は「おくがは深く」の意で、(3)「磯もしげくみ」は「磯もしげく」の意で、(1)「木深み」は形容詞「木深し」の連用形「木深く」の意で、それぞれ用いられていると見れば、必ずしも問題があるとは言えないととらえる可能性もある。これらは、上代に見える一般的ではない例が敷衍されたものと言えようか。

六

その他に、形容詞に関する用法で注意される例を挙げる。

カシコキロ 谷ふかみもろ木はあれど杉がうれを真下に見れば畏きろかも (一九〇三 明治三六 年八月一〇日詠)

カナシキロ 小夜泣きに泣く児はぐくむ垂乳根の母が島辺は悲しきろかも (同八月三〇日詠)

ムナシキロ 藁づつみたら木芽はおくらまく心はいまは空しきろかも (同四月一七日詠)

右は、本活用連体形が終助詞口を伴うもので、これらは、いずれもさらに助詞カモに続いていて、「体言、形容詞の連体形をうけて、助詞カモへ続ける」(『時代別国語大辞典上代編』口「助詞」の項)とされるものであり、上代に見え中古以降には基本的に見えない用法である。なお、子規の短歌にも、

うちひさす都の花をたらちねと二人し見ればたぬしきろかも (『竹乃里人』一九五六 昭和二二 年一月刊 岩波書店、一九〇一 明治三四 年詠)

年のはの北風さむくれなみの梅のつぼみのちひさきろかも (同、一九〇二 明治三五 年新年詠)
のように、タヌシキロカモ・チヒサキロカモが見えて、その影響が考えられようか。

カシコキロ くしびなる山は乗鞍かしこきろ山のすがたは目にかにかくに (一九一一 明治四四 年詠)

ところが、それらの例に対して、この例は、助詞カモに続くことなしに用いられていて、通常と異なっている。

さびしらに蟬鳴く山の小坂には松葉ぞ散れるその青松葉 (一九〇三 明治三六 年七月三〇日詠)

真日の照り日の照るなべにさぶしらに胡瓜の黄葉おちにけるかも (一九〇四 明治三七 年七月詠)

さびしらに枝のことごと葉は落ちし李がしたの石路の花 (同秋冬詠)

女郎花つかねて浸でし白河の水さびしらに降る秋の雨 (一九〇五 明治三八 年九月二〇日詠)

さびしらに母とふたりし見る庭の雨に向伏すやまぶきの花 (一九〇八 明治四二 年五月詠)

往きかひのしげき街の人みなを冬木のごともさびしらに見つ (一九一二 明治四五 年詠)

また、右のサビシラニ五例、サブシラニ一例も注意される。形容詞語幹が接尾辞ラを伴いさらにニ・ナリを伴って情態副詞・形容動

詞として用いられることは、上代・中古に見えて、シク活用形容詞語幹の場合は、

……小金門にもの悲しに(何佗芝良丹)思へりし我が子の刀自を……(萬七二三)

秋の虫何侘びしに(何佗芝良丹)こゑのする待みし影に露や漏り往く(新撰萬葉集三七四)

さかしらに夏は人まねさゝのはのさやぐしもよをわがひとりぬる(古今一〇四七)

などのようであるが、サビシラニ・サブシラニないしサミシラニの例は見当たらない。鎌倉時代に入ると、やまかげやすそのをかけてすむいほのものさびしにうづらなくなり(万代三一九六)のようにモノサビシラニの例が見えるが、些か珍しいものである。

さて、サブシラニの例は、子規の短歌に見出だすことができる。

下総の結城の小田の田雀は友うしなひてさぶしに啼く(『竹乃里人』「前掲」、一九〇一 年二月詠)

しかも、この例は詞書に「長塚節へ」とあつて、節への影響のあることが考えられるものである。

また、近代の詩には、次のようなサビシラ・サミシラの例を見出だすことができる。

盃を含みて目を閉ぢて、／唯さびしらの物思ひ、／君よ涙のせかれずば、／火影にそむけ人知れず。(薄田泣菫『暮笛集』春夜「二

八九九 年一二月刊 金尾文淵堂)

いづこにか薄日さし、きしりこきり斑鳩なげく／寂寥や、空の色なほ紅ににほひのこれど、／静かなる、はた孤独、山間の霧にう

もれて／悔と夜のなげかひを懇に通夜し見まもる。(北原白秋『邪宗門』顔の印象 A 精舎「一九〇九 年三月刊 易風社」、一九〇八

年三月作)

ただ、泣菫の例や白秋の例は、サビシラノやサミシラヤのように助詞ノ・ヤを伴うもので、上代・中古に見える用法ではない。また、泣菫の例は、節のいずれの例よりも、さらに、子規の例よりも古いが、泣菫の例が子規や節に影響を与えているかどうかはよく分からない。

からまるを否とたれかいふ鴨跼草の蔓だに絡め我はさびしる(一九二二 年詠)

さらに、サビシエの例も見える。エは、「文末にあつて終止法につき、発言内容を確認する。」(『時代別国語大辞典上代編』とされるもので、上代に見え中古以降には基本的に見えない終助詞である。

また、形容詞の語彙として注意される例を挙げる。

おぼほしく曇れる空の雨やみて筑波の山に雪ふれり見ゆ(一九〇三 年一月二〇日詠)

おほほしく水泡吹きよする秋風に岸の真菰に浪越えむとす（一九〇五）（明治三八） 年八月一八日詠

おほほしく掩へる霧の怪しかも我があたり辺は明かに見ゆ（一九〇八）（明治四二） 年九月二一日詠

右のように形容詞オボホシが用いられている。オボホシないしオボホシは、萬葉集に多く用いられるが、中古以降には基本的に用いられないものである。

こころぐき鉄砲百合が我が語るかたへに深く耳開き居り（一九一四）（大正三） 年五月一〇日詠

形容詞コログシも、萬葉集に用いられるが、中古以降には基本的に用いられないものである。

蒼雲を天のほがらにいただきて大い歌よまば生ける験あり（一九〇七）（明治四〇） 年詠

右の「大い」は、形容動詞オホキナリないし形容詞オホキイの語幹と見てもよいが、上代に見える形容詞オホシ「多・大」の連体形は多い意ではなく大い意に用いられる例があるので、その例と見ることとできる。

吹きたまる雪が真白き篠の群の椿が花はおもしろきかも（一九〇六）（明治三九） 年一月二一日詠

そして、右の文語形マシロシの例も注意されてよいかもしれない。この例は、三角錫子作詞「七里ヶ浜の哀歌」（一九一〇）（明治四三） 年一月）に、「真白き富士の根緑の江の島」とあるよりも古いものである。

さらに、不詳の例がある。

いづべゆか雨洩りたゆく聞え来てふけしく夜は沈みけるかも（一九一四）（大正三） 年六月二四日詠

に見えるフケシクがそれであるが、歌意から見て、形容詞フカシ「深」および動詞フク「更」とともにとらえられるものであろう。ク活用のフカシに対して、シク活用のフカシ（イ）があり、室町時代（さよひめのさうし）以降に例が見えるので、その連用形フカシクとフク「更」の連用形フケとが混濁したものであるうか。他にこのようなシク活用形容詞フケシ（イ）の例を知らない。

なお、形容詞スガシが節の短歌に用いられていることについて詳しく述べる必要があるが、それについては稿を改めることにした。（注一〇）

節の短歌には、格助詞ユ、副助詞ナベ、終助詞カモ、助動詞ユ・ラユなど上代に見えて中古以降には基本的に用いられないものがよく用いられるなどしていて、その点でも注意されるが、形容詞の問題からはずれるので今は措く。

節の短歌は、萬葉集など上代の語彙・用法を多く用いているが、類似しつつも上代・中古に見えない形容詞の語彙・用法のものも見えて、その点で鈴木氏（・口・目）の挙げられる近代短歌の例と共通するところがある。しかも、上代の語彙・用法と類似しつつも上代・中古に見えないものは、氏の挙げられる近代短歌の例より古いものがしばしばある点で注意されたい。

恐らく、節は、上代語を用いて詠もうとし、上代・中古に見えなくても上代語的なものを目指したのであろう。それが、結果として近代短歌の中で先駆的な用い方をしたことになったのではないかと考えられる。また、鈴木氏(H・Q・日・日・日・日・日)などが指摘される擬古的な語彙・用法の多くは、中古に見えないものも含めて中古語的なものであったが、節の短歌の形容詞の場合は、上代に見えないものも含めて上代語的なものであることが、それらと異なると言える。

(二〇〇四・七・二〇)

注

- (1) (一)「専修国文」43 [1988・9]、(二)「同」44 [1989・2]、(三)「日本語学」8—10 [1989・10]
- (2) (a) [1969・12 角川書店]、(b) [1970・1 同]、(c) [1958・6 筑摩書房]、(d) [1957・9 同]
- (3) [2000・2 第26刷] (1933・8 第1刷、1956・11 第22刷改版)。なお、節の短歌を含む近代の詩歌の例は、旧字体を新字体に改めて挙げることにする。
- (4) (四) [2003・9 武蔵野書院]「第六章はもと「馬琴の文語——形容詞カリ活用の場合——」(『国語学』60 [1965・3])・「近世における形容詞補助活用の展開」(『専修国文』57 [1985・8])、第十章はもと「近世に見られる形容詞の分類」(『近代語研究』8 [1990・6 武蔵野書院])、附録はもと「近世における形容詞補助活用の展開(承前)」(『専修国文』58 [1996・1])の一部、(五)「専修大学人文科学研究月報」54 [1967・5]
- (5) 後に第五節に挙げるx(ヲ)yミの形のミ語法の例でもある。
- (6) 後に第三節に挙げるケシ型形容詞ハルケシの例でもある。
- (7) [1955・3 吉川弘文館]第三章第三節三
- (8) 前稿(一)「一次的ケシ型と二次的ケシ型」(『国語語彙史の研究』20 [2001・3 和泉書院])
- (9) 後に第三節に挙げるアタタカシの例でもある。
- (10) 後掲注(17)箇所参照。
- (11) 前稿(二)「ケシ・カシイ・カイ」(『同志社国語学論集』[1983・5 和泉書院])に述べたように、源氏物語・紫式部日記にはこのような造語がいくらか見える。
- (12) 因みに、鈴木氏(四)第十章は、ヒヤケシ「音きくもよるはひやけきまし水をいかで日ぐらし結びなれけん」(六帖詠草)をカ(・ヤカ・ラカ)型との対応のないものとして挙げられるようであるが、後掲別稿(四)に挙げたように、ヒヤカ(神田第一郎氏蔵)白氏文集天永四年点・小林芳規

氏釈文)の例がある。

- (13) 別稿(一)「形容詞の形容動詞化と形容動詞の形容詞化」(『語文』大阪大学 75・76 [2001・2]) 参照。別稿(二)「形容詞語幹十カ・ヤカ・ラカ」(『研究年報』奈良女子大学 32 [1989・3])・(三)「十カの一形態——語基末がイ列・エ列の場合——」(『叙説』16 [1989・10])・(四)「ヤカ型語幹の構成」(「ことばとことのは」8 [1991・12])・(五)「カ型語幹の構成」(『国語語彙史の研究』17 [1998・8 和泉書院])・(六)「ラカ型語幹の構成」(『森重先生古稀記念ことばとことのは」[1999・3 同])・(七)「ヤカ型語幹とラカ型語幹」(『国語論究』7 中古語の研究 [1998・12 明治書院])・(八)「カ・ヤカ・ラカ型語幹の語基」(『国語語彙史の研究』19 [2000・3 和泉書院]) をも参照。
- (14) 前稿(一)
- (15) 近代短歌の他の例については、鈴木氏(二)・(三)参照。また、近世擬古文の例については、同(四)第十章参照。
- (16) 遠藤嘉基氏『訓点資料と訓点語の研究』[1952・3 中央図書出版社、1953・11改訂版 同] 内篇第三章(四)⑥、井手至氏(一)『遊文録』国語学篇 [1995・9 和泉書院] 第五篇第三章、もと「ク語法(加行延言) アクの説は悪説か——ク語法研究の展開——」(『国文学解釈と鑑賞』29—11 [1964・10])・(一)『同』国語史篇一 [1995・3 同] 第五篇第五章、もと「万葉集のク語法——憶良・家持作歌における特色——」(『人文研究』16—3 [1965・3]) 参照。
- (17) 『日本文法大辞典』マクの項(吉田金彦氏執筆)
- (18) 第三節に見たケシ型形容詞サヤケシの例でもある。
- (19) 第三節に見たケシ型形容詞シジケシの例でもある。
- (20) 『萬葉』191 [2005・1]。氏には「ミ語法の構文的意味と形態的側面」(『国語学』55—1 [216] [2004・1]) もある。
- (21) 第五節に見たx(モ)yニの形のミ語法の例でもある。
- (22) 第五節に見たx(モ)yニの形のミ語法の、子規の例でもある。
- (23) タヌシについて、現在、上代にはタノシであったと見られている。
- (24) 別稿(一)参照。
- (25) この清濁については、別稿(九)「上代の清濁と語彙——オホー・オボー(イフー・イブー)を中心に——」(『美夫君志』68 [2004・3]) 参照。
- (26) 別稿(十)「形容詞ヒキシ・オホキイとその周辺」(玉村文郎氏編『日本語学と言語学』[2002・1 明治書院]) 参照。
- (27) 別稿(十一)「多少と大小」(古井巖氏編『記紀萬葉論叢』[1992・5 塙書房]) 参照。なお、坪井美樹氏『日本語活用体系の変遷』第Ⅲ部第7章・第8章、もと、「古代官職名に見る接頭辞《オホー・オホキー・オホイー》」(『文芸言語研究』28 言語篇 [1995・9])・《大》と《多》——

平安和文における〈オホカリ〉の使用について——」(「同」35 [1999・3]) をも参照。

(28) 第二節に見た「キカモ」の例でもある。

(29) 別稿(三)「ク活用形容詞語幹を後項に持つ形容動詞語幹」(『国語語彙史の研究』21 [2002・3 和泉書院])・(三)「語幹を共通にする形容詞と形容動詞」(『同』22 [2003・3 同]) にふれたように、口語形マッシロイ(日葡辞書)の例がある。

(30) 堀内敬三・井上武士氏編『日本唱歌集』[1958・12 岩波文庫]、金田一春彦・安西愛子氏編『日本の唱歌』(上) 明治篇 [1977・10 講談社文庫]、安田寛氏『唱歌』という奇跡 十二の物語 讃美歌と近代化の間で』[2003・10 文春新書346] 十一、参照。

(31) 橋本四郎氏「ク活用形容詞とシク活用形容詞」(『橋本四郎論文集』国語学編 [1986・12 角川書店]、もと「女子大國文」5 [1957・3])、山田忠雄氏「形容詞スルドシの成立」(『日本大学文学部研究年報』4 [1954・3])、鈴木氏(六)『「かまびすし」の活用とその意味」(『国語学』62 [1965・9])・(七)「形容詞両活用(ク活・シク活)についての覚書(前)」(『専修国文』40 [1987・1])、村田菜穂子氏「「両活用形容詞——重複形容詞との関連から——」(『甲南国文』42 [1995・3])・(二)「虎明本狂言集のフカイとフカシイ」(『日本近代語研究』2 [1995・12 ひつじ書房]) 参照。

(32) 別稿(四)「形容詞スガシ(イ)「清」考」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』45 [2005・3]、掲載予定)

(33) 現在、上代にはナへと清音へであったと見られている。

キーワード：鈴木丹士郎氏 補助活用(カリ活用) ケシ型形容詞 未然形ケ・已然形ケ ミ語法

付記 本稿は、二〇〇三～〇四年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2) 課題番号一五五二〇二九〇)による研究成果の一部である。

(『国語語彙史の研究』24 [2005・3 和泉書院] 掲載)

補記 本稿の校正後、注(20)竹内氏論文の題は「ム型・ブ型・ミス型動詞とミ語法の形態論的必然性による推移」と変わった。